

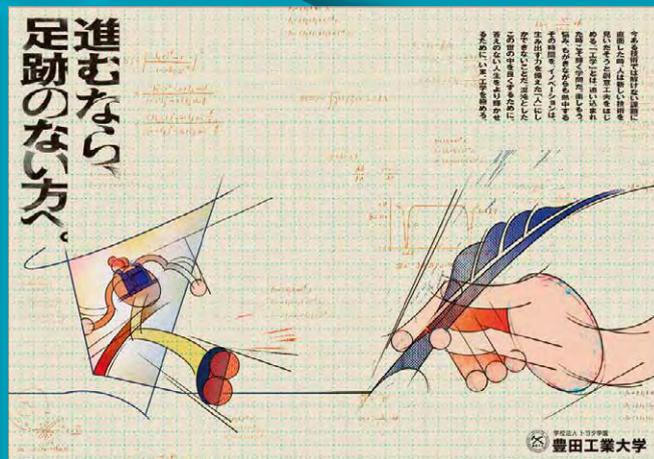
ADVANCE

TOYOTA TECHNOLOGICAL INSTITUTE

豊田工業大学広報誌

vol. 120

FEBRUARY 2025



CONTENTS

特集 保立学長5年半を振り返り	02~05
豊田工業大学 長期ビジョン	06
TTIブランド発信中!	07
英語で工学の世界を広げよう	08~15
他大学との交流	16, 17
NEWS FILE	18~20
TV対談番組に保立和夫学長が出演	20

SCHEDULE 行事予定 (2月~4月)

入試情報

■ 2月13日	2025年度学部一般選抜(一般入試)
■ 2月21日	2025年度学部一般選抜合格発表

学事

■ 2月3日~5日	卒業論文発表会
■ 2月6日~7日	修士論文発表会
■ 3月16日~4月6日	春期休業
■ 3月19日	卒業式・修了式
■ 4月1日	入学式

イベント

■ 3月5日	次世代文明センターシンポジウム
■ 3月6日	スマート光・物質研究センターシンポジウム



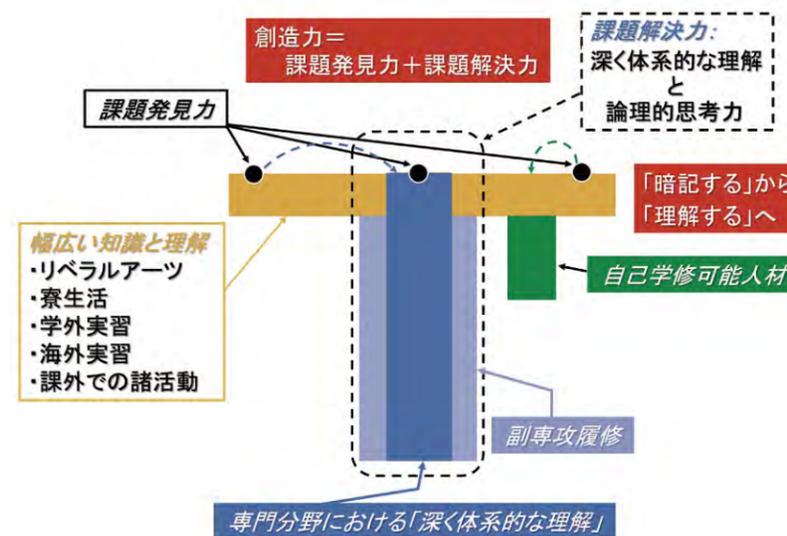
2019年9月から現職を務める保立和夫学長。
5年半の在任期間における本学の取り組みを振り返ります。

40年の歴史の中で培われた 潤沢な「仕組み」に、 “フィロソフィ”を注ぎ込み、 唯一無二の大学へ。

築き上げてきた教育・研究の仕組みを活かし、 目指したのは「自己学修可能な人材の育成」。

講演の機会があり、初めて本学を訪れたのは1998年。「小さいけれど面白い大学」との印象を持ち、非常に興味を惹かれたことを覚えています。2017年に副学長・教授として赴任すると、小さな大学だからこそその強みと、他大学にはない教育・研究の仕組みの豊かさを実感しました。国立大学並みの約10というST比（教員1人当たりの学生数）は教育の手厚さを物語っていました。潤沢な研究費や豊富な実験・実習、学部生の企業でのインターンシップ、大学院生の海外研究機会もあり、「モノづくり」実践の場である工房とクリーンルームも完備したキャンパスは、2020年のリニューアルでいっそう充実しようとしていました。これらを活かしてもっと強い大学になれると確信し、では何が必要だろうかと、教員や学生の様子や声を、2年半にわたって見聞きました。

そして2019年、学長就任と同時に掲げたのが、「大学ですべき学修とは、単に知識を覚えるのではなく、真の理解である」という“フィロソフィ”の浸透です。当たり前には聞こえるかもしれませんが、このことは非常に重要な意味を持ちます。理解とは、教科書に書かれた一つひとつの知識、つまり先人が導き出した「結論」に対して、「なぜそうなるのか」と自問して、自分で「理由」を考え手繰り寄せ、納得することです。これは正に「論理的に考える」ということです。その積み重ねによって、専門分野への体系的な理解が生まれます。すると他の分野についても同じように論理的思考で理解を深めていける「自己学修可能な人材」となり、一つの専門性だけでは解決できない世の中の複雑な問題にも立ち向かえる、真に社会貢献できる人材となるのです。フィロソフィの浸透によってそのような人材を育成すべく、今日まで教職員のみならずと一体となり、さまざまな取り組みを行ってきました。



課題発見力と課題解決力および創造力の関係図

「理解の獲得」に重きを置く授業、 「豊田工大メソッド」を形に。

具体的な取り組みの一つが、「豊田工大メソッド」と名づけた授業の方法です。真の理解を得るには、学生は公式を覚えるような「作業」ではなく、頭の中で論理的に考え「そういうことか!」と納得する必要があります。限られた学修時間内でそのプロセスを行うには、各教員が授業の進め方や課題の出し方を工夫しなければなりません。

例えば、ある教員の授業には、同じ内容が3回登場します。1回目に教え、2回目に演習問題を解き、3回目に答え合わせを行います。1回目に学んだ内容を自分で考えて理解しなければ、翌週の演習が解けません。また、もし3回目の答え合わせで間違っていると分かれば、「なぜ?」と、再度、理由を手繰る必要があります。このように、学生が考えて理解するための流れを作っているのです。ただし、課題の量が多すぎると、結局、公式を使って解くだけの作業に陥ってしまいます。レポートの数を減らして論述式にするなど、レポートの質を変えることで理解に時間を割き、「分かった!」という感動までたどり着くことが重要です。

メソッドと聞くと、一つの形式に則った方法論を想像するかもしれませんが、そうではありません。豊田工大メソッドは、前述の例の他にもさまざまな形があ

る「やり方群」。講義・実験・演習の特性に合わせて、学生の理解を促進する方法を各教員が工夫し、やり方群は徐々に大きくなっています。2024年度の学生生活実態調査では、「自ら論理的に考えるなどの意識や行動が向上した・大いに向上した」と回答した学生は全体の90.5%となっており、豊田工大メソッドの成果が現れ始めていると感じています。

体系的な学修で専門性を深められるよう、 カリキュラムの体系を見える化。

冒頭で仕組みは揃っていると延べましたが、一部、仕組みの見直しも行いました。教務委員会主導で実施したカリキュラム改定がその一つです。

本学は、従来、1・2年次で工学の基礎を幅広く学び、3年次への進級時に機械システム・電子情報・物質工学のいずれかを主専攻分野として選択する方式でした。2022年度以降の入学者では、より専門性を高められるよう選択時期を半年前倒して、2年次後期から2年半にわたり主専攻分野を学修できるようにしました。

また、各専攻のカリキュラムには、科目同士のつながりを視覚的に把握できるカリキュラムマップとカリキュラムツリーを制定。学生はこれらの図を見て、担当教員と相談しながら履修科目を決めています。学

間は体系的にできています。単位を取りやすそうな科目をつまみ食いの履修ではなく、学問体系のつながりを理解できてこそスペシャリストが育つと考えての変更です。

さらに、これからの社会での活躍に欠かせない「AI人材」を育成するため、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に対応した「モノづくり志向型データサイエンスAI教育プログラム」を新設し、そこに「データサイエンス実践集中演習」を開設しました。地元のモノづくり企業から実際の開発現場で取得されたデータを提供いただき、学生が解析を行う、本学ならではの科目です。2023年度には東海地区の私立大学初となる「応用基礎レベル」に認定、2024年度には国公立を含めた中部地方の大学では初の、私立大学では全国でも5校のみの

「応用基礎レベルプラス」に選定されました。

この他、フィロソフィの核となる「論理的思考力」を、ディプロマポリシーとシラバスの「学習・教育目標」に明記しています。学部につき、すでに大学院のカリキュラム改革にも着手。アップデートは今後も続きます。

1学年100人と小規模な中にも多様な個性を。刺激し合う環境を期待し、入試を改革。

在任中の大きな変化の一つとして、学部入試の改革があげられます。本学はもともと、社会人学生が一定数在籍するなど、多様な学生が学ぶ環境ではありますが、入試方式の多様性を高めたことにより、これまでも増して、強みや興味が異なる個性豊かな学生が集まっているような印象を受けます。

改革前、一般選抜に関しては、「大学入学共通テスト」と一次選考合格者に対する「面接試験」を実施する方式のみでしたが、2024年度入試からは、新たに本学独自の一般入試（物理または化学のいずれかと英語・数学の計3科目・記述式）、帰国生徒特別選抜、国際バカロレア特別選抜を設置。これにより、多様な学生が集まり互いに刺激し合う効果が期待され、上述のような環境が作り出されています。

学内における英語学習関連の活動でも、多様な学生がそれぞれの個性を発揮し、日々切磋琢磨している姿を目にすることができます。今後、さらに一人ひとりの学生が輝く大学となることを期待しています。

2024年度からの長期ビジョンは、学生と教員にとって新たな挑戦のスタート。

さて、本学では2024年度より、今後15年間の長期ビジョン（次ページ参照）をスタートさせました。既存の強みに新たな挑戦を加え、国際産業リーダーの育成と、研究成果の社会還元による地球課題の解決ができる大学を目指します。

ビジョン実現の最大のポイントと言える挑戦が、前述した豊田工大メソッドの確立と実践で、そこで大切となるのが「理解の束」です。学生は入学してすぐ、「覚えることではなく理解することが大学の学修である」とマインドチェンジをして、その後「なぜそうなのか？」と考える学修を繰り返すことにより、理由と結論をつなぐ物語＝理解を得ていきます。さまざまな科

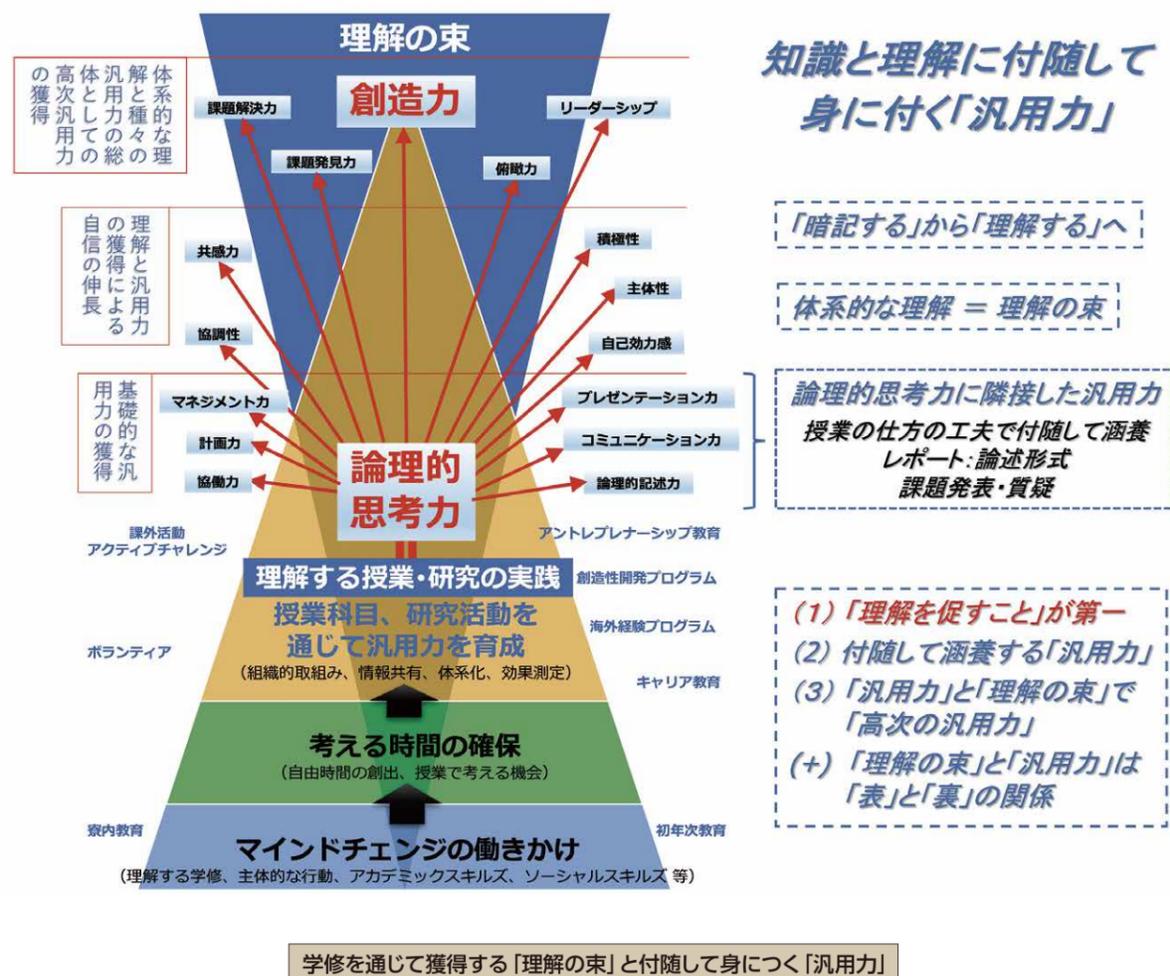


「山椒は小粒でもピリ辛い」大学です。ブランディング・メッセージ「進むなら、足跡のない方へ。」と共に、本学のさらなる発展にご期待ください。

目の理解が束になると、課題発見力や課題解決力が養われ、創造力、つまり「研究力」が身につきます。また、頭の中で言葉を使って組み立てた思考を外へ発することが、論理的に記述する力や、きちんと説明して相手の理解を得られるコミュニケーション力といった「汎用力」にもつながります。それが自信となって、相手に一步譲ることができる高い「人間力」も得られ、世の中で最も大切な人間関係も良好に築けるのです。

野球や各界のスターのように、学修以外のことでも何かを突き詰めれば、もちろんそうした成長は得られます。けれど工学の学びでも、理解が束となる学修をすれば、そうした力が自ずとつくるのです。単に覚えて課題をこなすだけの大学生活は一見「タイパ」が良いようですが、これほどもったいないものはありません。毎日の学修を通して人生に必要なさまざまな力を得られる方が、むしろ「コスパ」も「タイパ」も良いことに、本学の学生は気づいています。大学をフルに活用し、人生そのものを磨いてくれる学生が、ひとり、ふたりと増えていってくれたら嬉しく思います。

最後にもう一つ。長期ビジョンの推進は教員にとって、壮大なFD (Faculty Development=教員が自分を高めていくこと) を意味します。幸い本学には、教員がお互いの講義を見てアドバイスし合いブラッシュアップしていく仕組みもあります。そうした機会を積極的に活用し、お互いに関心を持ち仲間と協力して一体感を持って進めれば、唯一無二のビジョンの実現につながると信じています。



学修・研究の成果を、地球課題解決のために活かす
国際産業リーダーを輩出する大学でありたい。

本学の使命は、トヨタ自動車の創業者・豊田喜一郎が構想した「産業技術の発展を支える人材を育成する大学」の具現化を、将来にわたって果たしていくことにあります。1981年の開学から40年以上が経ち、社会の変化がますます激しさを増す中で、その具体的な方法とフィロソフィーを示すため、2024～2038年の「長期ビジョン」を策定しました。

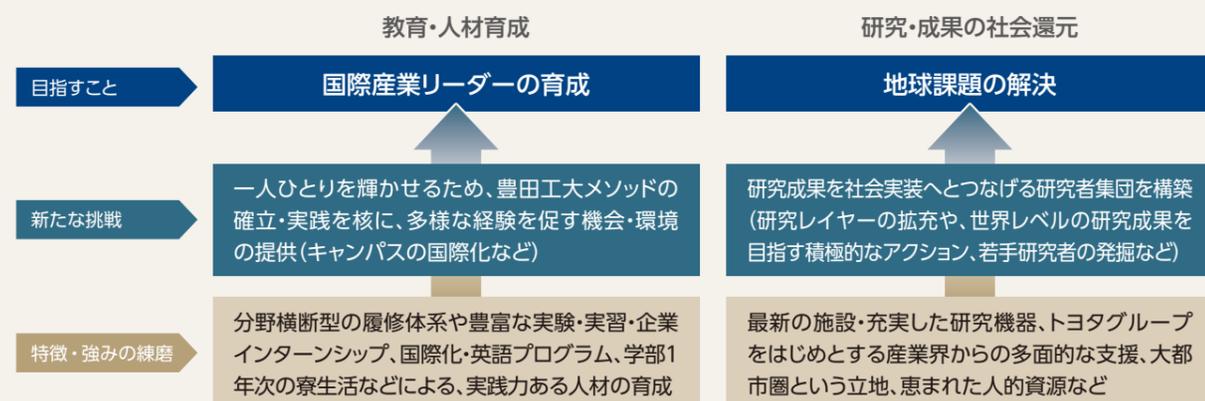
ビジョンの核となるのは「豊田工大メソッド」。教科書の知識をただ覚える学修や、教員の指導に従うだけの研究ではなく、結論に対応した理由に納得できるまで考える学び方こそが、逞しい創造力や豊かな人間力を備え、世界の産業技術を先導し、さらには地球課題の解決に挑むことができる人材の育成につながると考えています。

有言実行が本学の特長です。小規模大学ならではの一体感ある運営や密度の高い学び、安定した経営基盤といった強みを存分に活かし、ビジョンを実現していきます。

ビジョンの全容は
ホームページ
をご覧ください



●ビジョン概略イメージ



●実現に向けたシナリオ

「豊田工大メソッド」により、「覚える学修」ではなく「結論に対応した理由に納得するまで考え理解する学修」を徹底。専門分野への深い理解と論理的思考力を身につけた、生涯にわたって自己学修を続けられる人材を育成します。加えて、情報教育・アントレプレナーシップ・学外経験など、時代に合った学びの機会を提供します。



基礎・基盤研究から、実用に近い統合型エンジニアリング研究へつながる研究レイヤーのうち、本学が得意としてきた物質・デバイス（基礎・基盤）研究に加え、サブシステム・システム（統合型エンジニアリング系）研究を拡充。各研究レイヤー間と分野間の、縦横の連携を強化し、社会実装を促します。

学生の海外経験や教員のグローバルな活躍を促進。研究室やキャンパス内への海外研究者・留学生受け入れなども積極的に行います。

本学発の技術の社会実装やベンチャー発出を目指します。社会人学生の育成や子ども向け工学体験などの社会貢献にも取り組みます。

学生の多様化につながる入試制度改革や、大学運営・授業改善への学生参画促進などにより、さらに魅力ある大学となる運営を追求します。

TTIブランド 発信中！ さまざまな場面で「存在感」を高めています！

NEWS 1 「THE世界大学ランキング2025」国内大学20位タイにランクイン

2024年10月9日にイギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が、「THE世界大学ランキング2025」を発表し、本学は昨年同様1001+位にランクイン、国内大学では昨年度24位タイより順位を上げ、20位タイとなりました。

THE世界大学ランキングは、「教育・研究環境・研究の質・産業・国際的展望」の5分野17指標をもとに、THEが毎年発表しているものです。世界からは115の国と地域の2092校が対象。日本からは119校がランクインしました。

順位	大学名
28位	東京大学
55位	京都大学
120位	東北大学
162位	大阪大学
195位	東京工業大学*
201-250位	名古屋大学
301-350位	九州大学
351-400位	北海道大学、筑波大学
401-500位	東京医科歯科大学*
601-800位	広島大学、順天堂大学、慶應義塾大学、神戸大学、会津大学
801-1000位	岡山大学、東京医科大学、和歌山県立医科大学、早稲田大学
1001-1200位	千葉大学、藤田医科大学、浜松医科大学、金沢大学、熊本大学、京都府立医科大学、日本医科大学、東京農工大学、豊田工業大学、産業医科大学、横浜市立大学

*統合前の名称

国内の各種ランキングでも高い評価を受けました。詳しくは本学ホームページをご覧ください。



NEWS 2 「進むなら、足跡のない方へ。」ブランディングを進めています

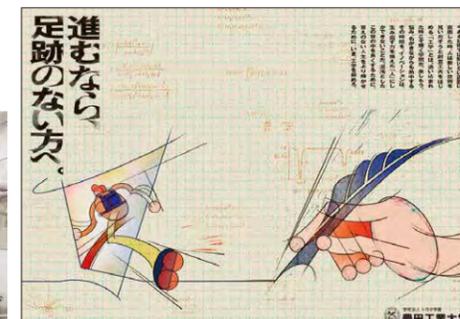
豊田工大ブランドを社会に向け発信するために、年末・年始に各所で広告展開を実施しました。学生の活躍や研究成果など「大学の価値」を一人でも多くの方に届けるために、メディア展開を積極的に進めます。

地下鉄交通広告 @名古屋市営地下鉄 名城線

一編成まるごと 「進むなら、足跡のない方へ。」で広告ジャック！



名古屋市営地下鉄 名城線



アートワークは、アーティストの大河紀(おおかわ のり)さんによるもの

ブランディング・メッセージ紹介ページ



ブランディングムービー @テレビCM & 名古屋駅前大型ビジョン

俳優の小畑依音さん、椿原慧さんが出演する、本学の「想い」を表現したムービー。シーンのほとんどは、本学研究室内で撮影されました。上記QRコード「ブランディング・メッセージ紹介ページ」でも動画をご覧いただけます。



名古屋駅前大型ビジョン NAGY



CMシーン

英語で工学の世界を広げよう

〈学部・修士海外英語演習〉

EG Academy校 @フィリピン・アンヘレス市(8/4~9/7、35日間)

Overview

マニラの空港から車で約2時間、クラーク国際空港から20分のところにある語学学校。生活に必要なものは徒歩圏内に揃っている、治安の良い便利な場所に位置しています。フィリピン人講師によるマンツーマンレッスンをはじめ、ネイティブ講師のグループレッスンも受講可。日本人以外の学習者も滞在しているため、グローバルな人的交流を通じ、自身の英語力を試せます。

Case 1



参加学生
新海 翔大さん
Shodai SHINKAI
学部3年(半田高等学校[愛知県]出身)

「異文化」に身を置き英語を学ぶ

フィリピン到着後にまず驚いたのは「日本との交通事情の違い」です。渡航前のオリエンテーションで説明を受けていたため、ある程度は覚悟していましたが、日本の事情とはかけ離れていたため、最初は戸惑いました。日常とは全く違う「異文化」の中で英語学習に取り組むことに対し、期待と不安が入り混じっていたように思います。私たちが滞在した「EG Academy」の先生は、同じClark地区にある「Mabalacat City College」の学生が多く、私たちと同世代。レッスン中の話も弾み、リラックスして学習することができました。楽しみながら、英語の会話力を養うことができる環境だったと思います。

自分で「英語漬け」の環境を作る

日本を離れ、日常とは異なる環境で学ぶ機会。これを何とか活かそうと、レッスンの時間外も自分なりに工夫して過ごしました。「EG Academy」の先生とのレッスンだけで英語を学ぶというのはもったいないため、他国から来ている留学生と積極的に交流しました。今回「EG Academy」に滞在した豊田工大生は23名と多数。意識しないと友人同士で過ごしてしまいがちですが、豊田工大

の仲間だけでなく、台湾などから来ていた学生と行動を共にし、意図的に英語環境を作り、「英語漬け」の時間を過ごすように心がけました。日本語で会話してしまうと、彼らが話の内容を理解できないため、みんなで楽しむことができません。そんな空気を作らないように、日本人同士でも自然と英語を使うようになるなど、常に英語で会話する「マイ・ルール」を持ちました。また、彼らの高い英語力にも刺激され、これからの英語学習への意欲となったように思います。

この英語環境のおかげだったのか、TOEICのリスニングスコアが留学後100点以上アップするなど、効果を実感することができました。一方で、リーディングの結果には少し課題を残してしまったので、バランスの良い英語学習を意識して、今後も英語力を向上させたいと思っています。



英語環境を自分でつくり、実践の場



フィリピンの庶民の足、ジブニーでの移動にも挑戦。戸惑いながらも「異文化」を楽しむ



「非日常」を味わえる貴重な機会をどう過ごすかはその人次第

日本だけでは完結しない、といっても過言ではない、グローバル化が進む「モノづくり」。世界の技術者・研究者と対等に協働するために、工学の専門的能力に加え、高い英語力の修得は、本学学生にとって不可欠なものとなっています。

英語での円滑なコミュニケーションを図るためには、単なる語学学習だけではなく、まずは相手のことをより深く理解したいという好奇心や自分のことを理解してもらいたいという気持ちを育むことも大切です。

本学では、語学学習および異文化理解の深化のためにさまざまな留学プログラムを提供しています。日本を離れ、現地の人びととの交流を通じ、自己理解を深めるプログラムから、国際的な環境で自身の研究をより発展させるプログラムまで、レベルや目的に合わせて挑戦することができます。2024年度に各プログラムに参加した学生の声を集めました。

Case 2



参加学生
峰松 忞成さん
Issei MINEMATSU
学部2年(名東高等学校[愛知県]出身)

学内の英語学習の仕組みとの連動

昨年海外英語演習に参加した同級生から、「英語にどっぷり浸かった生活」が送れると聞き、そのような環境に身を置いて、言葉としての英語のセンスを磨きたいと思ったことが、このプログラムの参加を決めた理由です。もともと英語には苦手意識があり、入学して以来、時間を見つけては学内施設のiPlazaに足を運び、英語学習に取り組んでいます。時には歯がゆさを感じながらも、それを「ばね」にしていますが、夏休みの期間を利用して、今の実力を確かめることができたのは良かったと思っています。

「国」だけではない枠を超えて、さまざまな人と学ぶ

自分が普段生活している空間を離れ、普段は接点がない人達と交流することで、さまざまな気づきがありました。フィリピン、台湾、ベトナム、サウジアラビア…といった、「国」という枠だけではなく、小さな子どもたちとお母さん方、仕



出発前、学内の「海外英語演習事前課題ポスター発表」で滞在先の理解も深める

事をしている社会人や小中学生など、多様な立場の人がスクールに滞在しており、その人たちとの関わりを通じて、視野の広がりを感じました。スクールに到着してすぐ、ほかの国から来た学生と食事に行ったり、同じスクールに滞在する子供たちと触れ合ったり、普段の生活とは全く違う時間を過ごすことにより得られた「枠にとらわれず人とつながってみよう」というワクワクした気持ちが、英語力向上への意欲を盛り立ててくれたように思います。

フィリピンという外国までやって来て英語を学ぼうとしている人たちは、基本的に誰かと「つながりたい」という気持ちが旺盛な方が多いです。さらに、何事に対しても向上心が強かったり、自己表現に積極的であったり、その姿に触発されて自分のモチベーションも上がっていきます。また、現在もiPlaza活動などに参加し、英語の会話力を継続して磨いていますが、夏休みで強化した英語力を、学内の恵まれた環境を活用してさらに向上させ、工学の研究の場でも発揮できる水準にまで高めたいと考えています。



多様性に富んだ環境は、学習意欲の向上に好影響をもたらす



日本から持参した折り紙を用いて、交流の機会を自ら企画

〈学部・修士海外英語演習〉

カリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) @米国・カリフォルニア州(8/8~9/10、34日間)

Overview

サンフランシスコ国際空港から車で約1時間半のところにあるデービス市。市の人口約6万人の半数が大学生または大学関係者という、大学を中心に形成されている学園都市です。市の中心的な存在、UC Davisで実施される「English for Science and Technologyコース」では「最新の工学・科学に関するトピック」の学習や「異文化研究プロジェクト」などで、学術における実践的な英語の習得を目指し、その一方で、ホームステイでの生活を通じて、“生きた英語”を学びます。

Case 3



参加学生

安田 優也さん

Yuya YASUDA

修士課程1年/スピントロニクス研究室
(明和高等学校[愛知県]出身)

学外実習の場で気づいた英語の必要性

学部3年次の学外実習で、実習先企業の海外取引先との会議の場に同席させてもらったことがあります。エンジニアの皆さんが巧みな英語で会話をしている現場を経験したこともきっかけの一つとなり、以前から留学したい気持ちがありました。大学祭実行委員やサークル活動などで忙しかった学部時代を経て、修士課程進学後での実現となりました。研究室での研究活動を通じ、英語力向上の必要性をさまざまな場面で感じているため、英語ネイティブから学べるこのプログラムの参加を希望しました。

「とにかくトライ!」のアウトプット中心

「実践」を意識したプログラムで、授業では先生が「とにかくトライしてみてください」といったスタンスで、失敗しても気にならない環境を提供してくれました。そのおかげで、いろいろな表現やフレーズを使って積極的にアウトプットできたのはとても良かったと思います。

特に印象的だったのは、留学生が2人ペアとなり校内を歩き交う人に声をかけ、アンケートを行うグループワークです。大学の構内とはいえ、学生だけではなく、さまざまな方がいるため、教室内と比べてコミュニケーションの難易度は格段に上がります。声をかけ立ち止まってくれた方も、私たちが語学を学ぶ留学生だとは知らないですし、こちらが会話の「主導権」を持っているため、相手任せにすることはできず、自分が話を盛り上げないとアンケートの内容が聞き出せません。この「実践」は、英会話の発信力や反応力を高めてくれた大きな要因だと考えます。



夕食はお父さんの手料理。フライドチキン、カレー、トルティーヤ、すべて美味



本学からの参加者8名全員で、仲良く大自然を満喫



カリフォルニアの青い空もと「とにかくトライしてみてください」を実践

また、プログラム外での活動でしたが、「カンパセーションクラブ」という、外国人留学生との交流を目的とした、現地学生が運営するサークルへの参加も非常に有意義でした。週に1度開催されるこのサークル活動は、現地の学生と交流できる絶好の機会であったため、ネイティブが話す英語にどっぷり浸かりながら表現力を磨くことができたと思います。留学は英語学習が目的ではありませんが、現地で暮らす方との交流もそれと同等に重要な要素。親しくなった現地の友人とは帰国後も連絡を取り合っています。

帰りの飛行機で英語力の変化を感じる

アウトプットとインプットのバランスが良い授業に加え、友人との交流やホストファミリーとの生活で楽しみながら英語力を向上できました。1か月近くを過ごし、帰りの飛行機の中かでアメリカのTV番組を視聴したとき「(行きの飛行機の中で番組を視聴した時より)英語がするすると頭に入ってきて、スムーズに理解できる!」と成果を実感することができました。

また、豊田工大の参加学生とのつながりを深められたのも良かったです。お世話になったホストファミリーとパーティーを開き、みんなで日本食を作って振る舞ったのも良い思い出です。

Case 4



参加学生

池野 音葉さん

Otoha IKENO

学部3年生(南山高等学校[愛知県]出身)

まずは学内の仕組みをフル活用

学部1年生のころからiPlazaの活動を利用するなど、英語学習に力を入れて取り組んできました。その実力を本場で試してみたかった、というのが一番の参加理由だと考えています。

入学当初、自分の英語力不足を思い知るようなことがいくつかあり、とても悔しい思いをしました。これは何とかしなければと焦りましたが、学内にはiPlazaという、学生ならだれでも利用できる英語学習のための仕組みがあるため、積極的に参加して英語に触れるようにしました。1年生は特に、多くの学生がiPlazaを利用します。みんなこれから英会話を学ぼうとする人ばかりなので、英語を話すことに抵抗を感じないですし、ネイティブの先生方も優しくサポートしてくれるので、iPlazaは「英語学習のハードル」を下げてくれたように思います。iPlazaの活動は私にとって「サークル活動」といえるほどで、その甲斐もあって、入学当初よりTOEICスコアが300点以上アップし、800点を超えるまでになりました。

とはいえ、まだ「英語を学ぶ場での英語」しか経験したことがないため、一般のネイティブの方とも交流ができる本プログラムへの参加を希望しました。また、大学より渡航費・授業料等の費用の一部を助成してもらったことも参加の決め手になりました*。

思い通りにいかない海外生活

期待したとおり、現地の方と交流する機会が多く、自分の英語力を把握することができました。このプログラムは滞在先がホームステイとなっており、現地のご家庭で生活しますが、私の滞在先は一人暮らしでお仕事をされている方のお宅でした。想像していた“家族でワイワイ生活”とは少し異なりましたが、洋画と一緒に見ておしゃべりするなど、自分から機会を作るようにしました。それにより“生の英語”

でリスニング力を鍛えることができたと思います。思い通りにはいかないこともありますが、頭を切り替えることで現状を打破していくことも海外生活では大事なことだと思います。

授業は、発音のクラス、工学的な専門用語を学ぶクラス、ビジネス英会話のクラスなどがあり、積極的にアウトプットを促すような授業が主でしたので、間違えても話す勇氣、堂々と英語を話す度胸がついたと思います。

次のステップに向け経験を活かす

海外の大学を経験できたこと、また、自分が海外でもなんとかやっていけると実感することができたことにより、この先の可能性が広がったような感じがしました。4年生に進級し、研究室に正式に配属されると研究中心の生活になっていくと思います。研究という専門性が求められる場面においても、英語が私の世界をより大きく広げてくれると思うので、これまで積み重ねてきたことを十分に活かしたいと思います。まずはTOEIC900点越えを目指します!

*English Step-Up Point (E-SUP) 制度

TOEICへの取り組みやiPlaza活動を通じて、ポイントを獲得・蓄積する制度。要件を満たすと、学部3年次の指定海外留学プログラムにかかる費用が一部助成される。



アウトプットを促すような授業では、「間違ってもいいから話してみよう」という勇氣が湧く



本場の英語のほかに、本場のディズニーランドも堪能



「英語を学ぶ場での英語」から一歩踏み出すも堪能

国立中興大学サマーキャンプ@台湾・台中市 (7/31~8/14、15日間)

Overview

台湾で2番目に大きな都市である台中市。国立中興大学のメインキャンパスは同市南区にあります。1919年に設立された総合大学で、文学部、農学部、理学部、工学部など11の学部が設置されています。本学とは2007年にスタートさせた「ダブルディグリー制度」などを通じ、長年の交流関係にあり、つながりの強い海外連携校の一つとなっています。

Case 5



参加学生

小山 和紀さん

Kazuki KOYAMA

学部3年(岡崎高等学校[愛知県]出身)

自分のキャリアに活かしたい

台湾は半導体生産能力が非常に高く、現在も世界的に存在感が高まっていますが、その発展がもたらした社会への影響を肌で感じたかったというのが参加を希望した一番の理由です。半導体産業の発展は、台湾経済の構造を大きく変化させたと推察し、物価や雇用状況、治安や教育、その他の産業への波及効果など、現地で見たり聞いたりして、半導体産業への理解を一層深めたいと思い、そのためには現地に足を運ぶのが最適であると考えました。

また、現在私は量子界面物性研究室にプレ配属*となっており、「半導体」は私の研究と深い関わりがあります。今後、研究を通じて専門性を深めていきますが、この領域で行われている研究がどのように社会に還元され、世の中にどのようなインパクトを与えているのか、マクロ的な視点を養う良い機会だと思いました。また、それらの探究心を高め、自分自身のキャリア形成に活かせることにも期待し、参加を希望しました。

*プレ配属：3年次前期までの成績上位者を対象に、希望者は3年次後期から研究室での指導を受けることができる制度

半導体のリーディング企業 「マイクロン・テクノロジー」を訪問

中興大の研究室に配属されるため、海外の“ラボ生活”を経験できることがこのプログラムの特徴だと思います。研究室では、1名の修士学生が「ホスト学生」として私に付き添い、いろいろとお世話をしてくれました。ちょうど彼は研究プロジェクトの最中で、とても忙しそうにしていたのですが、シミュレーションの仕方を教えてくれたり、彼の手ほどきのもと、パソコンでプログラムを組み、スパコンで実行したりするなど、親切に実習に付き合ってくれました。

また、現地で論文を読む機会などがありましたが、この時、豊田工大での学修の積み重ねの重要性を実感しました。普段の講義で修得した「知識」が「論文を理解する力」となっていることに気づき、普段と異なる環境で“力試し”ができるのも良かったと思います。

また、プログラムに組み込まれていた「Industrial Visit」は、台湾半導体産業に興味を持つ自分にはぴったりの内容で、アメリカの半導体製造会社「Micron Technology」を訪問。工場見学や企業説明などを受け、世界的な企業で働くエンジニアの講話を聞いたのは貴重な経験だったと思います。

日ごろから身の回りの物事に興味を

プログラムには多様な国から、多様な状況で学ぶ学生が集まっていて、言葉どおり、多様性に富んでいました。その多様性から得られる刺激によって、自分が物事に対していか「無関心」であるかに気づかされました。「グローバル人材になる」ということは、英語が話せることだけではありません。自分自身を知ってもらいたい、相手を知りたいという気持ちがないと、異文化間のコミュニケーションは活性化しません。これには常日ごろから、自分の身の回りの物事に興味を寄せ、それに対する疑問を持ったり、自分で考えを導き出したりする習慣が必要だと痛感しました。今後もそれを意識し、国際的な場においては、お互いのことを深く理解し合えるようになりたいと考えています。



グルメの宝庫、台湾。この日は、ベトナムからの留学生おすすめの「ベトナム風サンドイッチ」にトライ



ホストとしてアテンドしてくれた現地の修士学生と“お守り”作りを体験



「Micron」での記念撮影。リーディングカンパニーの内部に立ち入る貴重な経験



多様な人との交流を通じ、真のグローバル人材を目指す

泰日工業大学サマープログラム@タイ・バンコク (8/26~9/3、9日間)

Overview

泰日工業大学(TNI)は本学の海外連携校の一つ。タイ日友好とタイ産業界の人材育成を目的として設立された「泰日経済技術振興協会」が母体の日本と関わりの深い大学です。現地学生との交流や文化体験などを通じて、相互理解を深めることがプログラムの趣旨。タイ語の初歩を学んだり、現地学生と共にバンコク市内の観光地を巡ったり、魅力あふれるプログラムです。

Case 6



参加学生

岡本 航紀さん

Koki OKAMOTO

学部4年/流体工学研究室
(麗澤高等学校[千葉県]出身)

グローバル環境でも“自分らしさ”を

これまで私は、このような海外プログラムに参加したことがなく、海外に行って現地の方との交流を深めたいと考え、このプログラムに参加しました。

学部4年生になるまで、特に海外や英語への興味を持っていませんでしたが、学部4年生で流体工学研究室に正式配属となり、在籍されている外国人研究員の方に装置の使い方や実験の指導を受けるなど、日常的に英語でのやり取りが発生しました。この中で、自身の英語力の無さを痛感し、英語力向上の必要性を感じました。

当初はそういった経験による「英語力への焦り」から英語学習を始めました。しかし、英語学習を通じ、日本の外に目を向けることで、「もっと海外を知りたい、コミュニケーションをとりたい、英語で自分を表現したい」と思うようになりました。

この意識へと変化したのは、今年に入りiPlazaの活動に積極的に参加し、英語力を磨いたり、国際感覚を養ったりしたことによるものです。ただ単に「英語を流暢に話せること」を目標にするのではなく、「自分らしさ」を表現できるまでになりたいと考えました。それにより海外で外国人と交流ができるこの機会を活かしたいと思い参加しました。

目的意識の高いTNI学生と共に過ごす

語学を学ぶ、というより、日本に興味関心の高い現地学生との交流やタイの文化を知ることにより、相互理解を深めよう、ということがメインのユニークなプログラムでした。泰日工業大学が日本の学生を招き入れ、普段彼らが学ぶ、日本語の実践的な場としているようでした。私たち日本からの留学生は、現地学生の日本語力の高

さや将来日本で働きたいという強いキャリア意識に驚かされ、今後の語学スキル向上への意欲、グローバル社会の一員として自分がどうしたいか考えるなど、自己啓発の必要性を痛感させられる貴重な機会だったと思います。

具体的な活動内容としては、エメラルド寺院・ワットポー観光、マングローブ植林体験などはじめ、独特な文字で有名なタイ語に触れる、地域ならではの見どころや飲食店を現地学生に案内してもらうなど、多種多様な経験をすることができました。9日間という短い期間でしたが、彼らと過ごした時間は、密度が濃くかけがえのない思い出となりました。

自分を磨くチャンスは見逃さない

本学の修士課程への進学を決めていたので、学部4年の夏休みに「行くなら今だ」と参加を即断即決したことにより、貴重な機会を手にすることができたと思います。私の場合、ちょうど海外への興味が高まり、英語力の向上を目指している最中での参加であったため、一層学習意欲が湧いたように思います。また、今回プログラムに参加して、現地学生の温かい、感情豊かな「もてなし」には本当に心を打たれました。母国語、外国語にかかわらず、自分の感情を言葉で表現し、相手に伝え、自分の世界を広げていきたいと、彼らとの出会いを経験して強く思うようになりました。工学を志すうえでも、研究を通じて世界中の人びととつながっていくためにも、まだまだ、今後も学内でのスキルアップのチャンスなどを利用し、挑戦を続けたいと思います。



言葉だけでは伝わらない“自分らしさ”を表現



観光資源が豊かなタイ。現地学生と巡ることで魅力が増す



交流を通じて“人とのつながり”にお互い感謝

〈修士海外学外実習〉

 **Ulster University HYSAFER Centre@英国・北アイルランド(ベルファスト)**
(8/1~9/27、58日間)

Overview

修士海外学外実習とは、語学の向上を目指すプログラムとは違い、「研究力」を高めることを目標としています。技術者・研究者として活躍していくためには、日ごろから国際的な視野で産業や技術の動向を察知し、実際の現場で技術や研究に携わる人たちと接する経験が必要です。

海外の研究機関などで実習を行い、知識の幅を広げ、コミュニケーション力、マネージメント力、課題発見力、問題解決力を向上するなど、グローバルな環境で活躍できる人材育成を目的としています。

Case 7



参加学生

伊藤 大悟さん

Daigo ITO

修士課程1年/熱エネルギー工学研究室
(一宮高等学校[愛知県]出身)

「高圧水素噴流火炎」に関する未解明な現象を追求

ガスタービンなどの燃焼器での利用および高圧水素タンクや配管からの漏洩を想定し、安全性や工業利用の観点から「高圧水素噴流火炎」の現象把握は大変重要です。出口形状が円形であるノズルから噴出する、「高圧水素噴流火炎」の着火・保炎特性については多くの研究者が取り組んできましたが、ノズルの出口形状が非円形の場合については、axis-switchingと呼ばれる対称軸が回転する現象が報告されているのみで、燃焼火炎については未だ解明されていません。

私の学部研究では、円形ノズルと同面積の正方形および長方形のノズルを作製し、保炎に必要な圧力や、ノズルから火炎基部までの距離となる「浮き上がり火炎距離」の変化を計測する実験を行い、数値計算から流速や水素の濃度分布の取得を試みました。修士における研究では数値計算をメインにして、高圧水素噴流のより詳細な乱流構造や燃焼計算に取り組み、非円形ノズルでの保炎機構を明らかにすることを目指しています。

水素社会実現を目指すエキスパートに囲まれての実習

先述のような研究テーマを設定していることから、数値解析の理解を深めることを目的にHYSAFER Centreでの実習を志望しました。実験だけではわからない渦の構造に注目したいと考えましたが、これまで使用したモデルでは流れを時間平均してしまうため、詳細な現象の把握が困難な状態でした。

精度の高い結果を得るには、最適なモデルや条件を設定する必要があり、多くの知識と経験が必要になります。実習先のMolkov教授の研究室では、水素社会実現に向けて、長年水素の安全性に関する数値解析を行っており、私にとって本研究室での実習が最適だと考えました。

日常とは異なる研究環境において、多様な人びとから学ぶ

実習先の研究室のメンバーは全員、水素に関係する研究をしており、知識が豊富な方ばかりでした。彼らの中には高圧水素の噴流の計算をしていた方もおり、解析に用いる効率的なメッシュの作成方法や境界条件、初期条件の設定方法について深く議論することができました。また、情報整理の方法やモデル作成の考え方を教えてもらったことで、自分の未熟さを思い知り、悔しい思いもしました。このような環境に身を置くことで、今後の研究方針を明確化することができたように思います。

一方、生活については、国籍や年齢、立場など全員が異なるため、研究室には「マジョリティ」が存在しませんでした。朝10時から研究が始まりますが、少し前に皆さんが集まりだし、飲み物を片手に談笑する時間があり、自分も交流を楽しみました。それぞれの国のお茶菓子(私は愛知名物「しるこサンド」を持参)をつまみながら過ごす時間で、相互理解が深まったと思います。☑



研究室の皆さんとのティータイムは楽しいひととき



研究室の方からの紹介でスポーツセンターのバドミントンサークルに参加



北アイルランドは日照時間が非常に長く、この写真の撮影時刻は20時26分

国際的な場において不可欠な英語と向き合う

研究計画のフィードバックなど、教授からの指導にうなずいて聞いていると「聞き取れない場合ははっきりと伝えないと、あなたは理解しないまま時間が過ぎてしまう。わからない時ははっきり言う、または理解した内容があるか、自分で言葉にして聞きなおしてほしい」と言われました。貴重な時間を割いているからこそ、きちんと理解していることを伝えて、結論から話すなど端的に伝えることを意識しました。また、話す内容が多い場合は、簡単な資料を作成して、前提をはっきりさせた状態で相談するようにしました。

実習前は、英語の文法や発音などに急にこだわってしまっていたのですが、そんなことは気にせず、「英語を話すことへの抵抗」はなくなりました。多様な人とコミュニケーションをとるために、「とにかく話す」「しっかり聞く」ことが大切です。日本のサブカルチャーを含めた文化や魅力的な観光地を紹介するなど会話が弾み、日本に興味を示してくれることも交流のきっかけになります。「多様な人で構成されるコミュニティの共通言語である英語」の重要性を感じ、英語力については継続して磨いていきたいと思っています。

豊田工大 学内でも英語力を磨く機会は豊富にあります!
英語科学技術プレゼンテーションコンテスト

Overview

iPlaza活動の一環として「英語科学技術プレゼンテーションコンテスト」を毎年開催しています。16回目の開催となる当コンテスト。今回は学部1年生3名、2年生1名、3年生2名、4年生2名の計8名がエントリー。どの参加者からも聴衆の好奇心をかき立てる印象深いプレゼンテーションが披露されました。今回第1位に輝いた2名をご紹介します。

Case 8

参加学生

加藤 早紀さん

Saki KATO

学部3年
(菊里高等学校[愛知県]出身)



テーマ
Three tips for better sleep

▶加藤さんコメント

後輩にプレゼンを聞いてもらい、客観的な意見を頼りに技術を磨きました。スライドの情報量を多くすると、そちらに意識がいきってしまうので、話す内容に集中してもらえるように工夫しました。私も難解な英単語が耳に入ると、思考を停止してしまいがちです。聞き手が理解しやすくなるように「間」を設けるのもコツ。5分間のプレゼンの中に緩急を入れ、聞き手に思考を促すような構成にしたことが結果につながったかもしれません。iPlazaの活動は、楽しいパーティーなどもあり、気軽に参加しています。準備などが大変ですが、人前で話す技術を磨きたいため、今後もプレゼン企画に積極的にエントリーしたいです。

参加学生

河合 健斗さん

Kento KAWAI

学部4年/知能情報メディア研究室
(トヨタ自動車株式会社入社)



テーマ
Diffusion Models

▶河合さんコメント

大胆なジェスチャー、話し方の抑揚などで、聞き手が「ここがプレゼンの肝だな」と明確に分かるように、強弱をつけました。視覚的にも理解しやすいように画像をたくさん用い、難しい部分はゆっくり、はっきり発音するように心がけました。一方で、動作と口調は堅くなりすぎないように、リラックスした雰囲気づくりを意識しました。

プレゼンは「発信」する行為ですが、「伝える」相手がいることを意識することが大切です。コンテスト出場者同士での事前練習や、研究室のメンバーからのアドバイスを活かし、プレゼンのクオリティを少しずつ上げ本番に挑みました。



交流を通じて自己理解を深める

～奈良女子大学と本学女子学生の交流会実施～

他大学の授業や研究室の見学、ならびに、異なる環境に身を置く学生との意見交換を通じて、自身の視野を広げ、将来への展望を深める機会として、奈良女子大学と本学のそれぞれのキャンパスにおいて交流会を開催し、10月13・14日は、奈良女子大学の学生が本学を訪問しました。

【参加者】
奈良女子大学 理学部3年 2名
工学部2年 2名
豊田工業大学 学部4年 1名
学部3年 2名
学部2年 3名



“思考”をみんなで楽しもう

榊裕之・本学前学長（現、学校法人トヨタ学園フェロー/豊田工業大学名誉学長）が奈良国立大学機構の理事長を務められているご縁もあって、昨年度より学生同士の交流の機会を設けています。

今年も学生が主体となって企画し、交流会の実施を実現。奈良女子大学の理学部、工学部の学生と本学女子学生が企画に参加しました。

交流会のメインは、テーマを設定し、それについて意見を出し合い、考えを掘り下げるという対話企画。今回のお題は、「ジェンダーギャップ」や「ジェンダーバイアス」などの社会問題にもつながる、「理系女子を増やすにはどうしたら良いか」。

参加した学生たちは全員「理系に分類される学部」で学んでいます。日々の生活で感じること、不安に思うこと、期待することが同じだったり、違ったりします。

「みんなもいろいろな意見を出してくれるので、それを受けて、自分はどんなだろうと、頭を働かせる過程がとても楽しかった。思考が止まらない、そんな感覚でした」と参加者の一人が感想を語ってくれました。

仲間との交流を通じて強い意志を再確認

一般的に理系の世界、特にエンジニアが活躍する領域は、男女比に差があり、昨今では女性の活躍への期待が高まっています。その領域に飛び込んできた女子学生たちは、自分の特性を活かしたいと思いつつも、依然として男性中心の組織構造にギャップや戸惑いを感じたり、不安になったりしてしまうこともあるようです。

違う環境で奮闘している仲間と志を共有することで、改めて自分を励ますことができ、「自分自身をもっとブラッシュアップしたい!」という自分の中にある強い意志を、各自が再確認しました。



交流を通じて研究の視界を広げる

～シリコン系半導体ニューフロンティア研究会開催～

半導体分野に関連する研究を行う愛知工業大学、岐阜大学、名古屋大学の教員および学生を本学にお招きし、研究紹介や施設紹介などを通じて交流を促進する研究会を11月22日に開催しました。

【参加者】
愛知工業大学 材料・デバイス工学講座
田岡紀之教授 電気電子材料研究室 1名
岐阜大学 電気電子・情報工学科 応用物理コース
久保理教授 久保研究室 4名
名古屋大学 情報デバイス工学講座
牧原克典教授 機能集積デバイス研究室 2名
名古屋大学 物質デバイス機能創成学講座
中塚理教授 ナノ電子デバイス工学研究グループ 8名
豊田工業大学 電子情報分野 沼田敏典教授
機能半導体デバイス研究室および半導体研究室 11名



半導体研究の可能性を追求しよう!

今回が初回となる当研究会は、本学の機能半導体デバイス研究室、沼田敏典教授の呼びかけにより実現。半導体領域研究に取り組んでまだ日が浅い学生を中心に、大学の“枠”を超えて交流を深めることが今回の研究会の趣旨です。開催にあたり沼田教授が「半導体は長い間スケールアップを追求してきたが、ナノスケールが当たり前となっており、微細化は限界を迎えている。そうすると、半導体を発展させるためには、どのような可能性があるのか、この交流会を通じて半導体研究の無限の広がりを知ってほしい」と述べました。また、岐阜大学の久保教授は、シリコン以外の新しい半導体素材などの研究成果について解説し、「研究者をやっていると外国人も含め、研究を通じた人的ネットワークが広がる。その楽しさもあるし、自分がやりたいと思っていることに向き合えるため、自身の人生を充実させることもできる」と、研究者としてのウェルビーイングにも触れ、学生が将来について考える際の参考となるメッセージも発信しました。



学生発表でお互いの研究を知る

各大学の教員の研究紹介の後には、学生による5分間の発表を行いました。本学、学部4年生の榊原玲央斗さん（半導体研究室/株式会社デンソー在籍）は、次の感想を話してくれました。

「自分も携わる、半導体に関連する領域で研究をされている教員や学生の前で発表するのは、特別な緊張感がありました。また、同じ半導体とはいえ、さまざまなアプローチを行っている他大学の研究を知る、大変貴重な機会でした。誰かの指示によるものではなく、高い目的意識をもって、学生自らが主体的に取り組んでいる姿勢が、発表内容からも伝わってきたため、自分自身の励みになりました。私は現在、卒業研究に取り組んでおり、研究の論理的な説明など、自分の発表に活かせる点が多かったです。私も今後、目的が明確になるまで理解し、「なぜこの研究を行うのか」という理由を突き詰めて、研究をさらに深めていきたいと思いました」



行政とも
一緒に

名古屋市天白区 区制50周年記念事業
「ふくし座談会」で地域とのつながりを考える



【参加者】
樋口 莉美さん
(学部2年 三田学園高等学校
[兵庫県] 出身)

本学のキャンパスが位置する天白区。久方寮生をはじめ、本学の学生の多くが住民として生活しています。その天白区において、今後50年の福祉の現状や課題について話し合う「ふくし座談会」が12月19日に開催され、樋口莉美さんが他大学の学生と共に企画し、区内の福祉関係者の方々と意見交換を行いました。

「ふくし座談会」テーマ/つながりあい・ささえあいのある地域へ～社会的孤立*の解消を目指して
*「社会的孤立」とは、家族やコミュニティとほとんど接触がない状態

Voice ～樋口さんの感想～

座談会では「地域の多様なつながり」について、意見を求められました。家族や学校といった自分が属するコミュニティの中では、どうしても「あるべき自分」を演じてしまいがちですが、その必要がない「第3の居場所」があると自分をもっと解放して、人とつながれるのではないかと、「第3の居場所」を地域に設けることで多様なつながり方ができるのではないかと

と、この地域に住む大学生の一人として、自分なりの考えを発信しました。今回は、自身が生活する地域が直面している課題を行政の方から直接投げかけられるという、大変貴重な体験だったように思います。天白区が世代を超えた交流のある街であってほしいと思いました。

FILE-01 地域連携

「哲学対話」について学ぶ「親学」イベント実施
～市教育委員会委託事業 たかしま小学校PTA主催セミナーに江口建教授が登壇～(9/26)

名 古屋市教育委員会が小中学校PTAに委託し、毎年実施されている「家庭教育セミナー」。

近隣の名古屋市立たかしま小学校PTAが主催する本セミナーに、本学の江口建教授(人文科学研究室)が講師として登壇しました。

本セミナーにおいて、江口教授が講演するのは今年で2回目。「実際に哲学対話

を体験したい」という参加者の声に応え、今回は「哲学対話」もご体験いただきました。「哲学対話」のお題は、当日に参加者から挙がった「つい子どもに怒ってしまうことってありますか」。対話を通じ、参加者間で「共感」が醸成され、思考の広がりや深まりを実感していただきました。

会場は本学・iPlaza。リラックスした雰囲気の中、共に学ぶ「親学」をお楽しみいただきました



FILE-02 国際交流

豪ビクトリア州総督が本学を訪問(10/25)

オーストラリア・ビクトリア州総督マーガレット・ガードナー閣下一行が、愛知県の職員の方々和本学を訪れ、保立和夫学長をはじめ、増田義彦理事長、神谷格・国際化推進委員長らがお迎えし、学内で懇談会を行いました。

ビクトリア州と愛知県は1980年に友好提携を締結。ビクトリア州が愛知県にとって、初めての海外提携先であり、今後

もより深い友好関係の構築が期待されています。

ガードナー総督は、経済学者や大学の学長として活躍され、産官学連携や学術振興に強い関心を持たれており、今回本学訪問を希望。国際化に力を注いでいる本学の強みなどを活かして、お互いの発展につながる協力関係構築など、さまざまな意見交換が行われ、今後の交流の可



可能性が期待できる大変有意義な時間となりました。

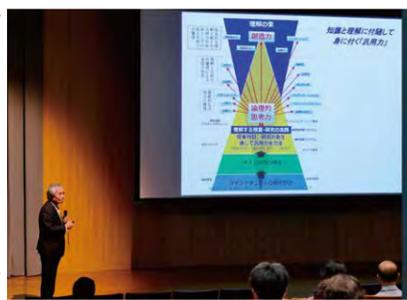
FILE-03 学内イベント

保護者懇談会を開催(11/2)

学部および修士課程学生の保護者を対象とした懇談会を開催しました。この日、約130名がキャンパスに集まり、齋藤和也学生部長より学生生活に関する講話をはじめ、学生部による就職・進路、学生支援についての説明を実施。

その他、教員との個別面談や施設見学などを行いました。本学では教育や研究の現場を保護者にも知っていただける機会として、年に一度、当懇談会を開催しています。

保立和夫学長による開催のあいさつでは、長期ビジョンの一部「豊工大メソッド」にも触れました



FILE-04 学内イベント

“トヨコウ”をどう使う? 進路ガイダンスを開催(11/14)

社会が多様化し、人の生き方も多種多様となっていますが、自分らしく充実した人生を送るために、学生時代において「進路選択」は誰も避けて通ることはできません。その「進路」について向き合う機会として、本学では学部3年生および修士課程1年生を対象に年に数回「進路ガイダンス」を開催しています。

今回はそのガイダンスに加え、より早

い段階から人生について考える意識の醸成を目的とした、学部2年生向けのガイダンスも実施し、内定を手にした先輩在学生の2名が、それぞれの体験を解説しました。

「トヨコウというステージで、どういったストーリーを描くか、そのストーリーでどんな力を養っていくのか」、自身の体験談を共有
左: 岡本晴貴さん(学部4年/光機能物質研究室、磐田南高等学校[静岡県]出身)
右: 大塚丞さん(修士2年/表面科学研究室、瑞陵高等学校[愛知県]出身)



FILE-05 研究イベント

2024年度 研究センターシンポジウムを開催(10～11月)

名 研究センターの活動状況を発信するシンポジウムを開催しました。年に一度開催するこのシンポジウムに、各領域のフロントランナーである右表の方々をお招きし、招待講演として最先端の知見を共有いただきました。



各シンポジウムの招待講演

第4回スマート情報技術研究センターシンポジウム/ 第20回ジョイントCSセミナー(10/3) [対面/オンライン開催]	
「大規模言語モデルとその学習手法」	NTT 人間情報研究所 准特別研究員 西田光甫氏(写真上段)
「Modeling Host-Microbiome Interactions: Exploring the Metabolic Interface and Community Dynamics」	Toyota Technological Institute at Chicago Research Assistant Professor Derek Reiman氏
第16回スマートエネルギー技術研究センターシンポジウム ～エネルギーの生成～(10/17) [応用物理学会 東海支部後援、対面開催]	
「シリコンという半導体材料に関する研究は終わったのだろうか?」	東京大学 名誉教授 鳥海明氏(写真中段)
「工業化学を志向した高効率均一系錯体触媒の開発と化学結合論まで立ち返った基礎化学開拓」	東京科学大学 理学院化学系 教授 山下誠氏
第14回スマートビークル研究センターシンポジウム(11/7) [対面/オンライン開催]	
「情報科学支援による高精度空力計測技術の開発」	早稲田大学 理工学術院 教授 松田佑氏(写真下段)
「市街地向け自動運転の実証実験とロバストな周辺認識技術の研究」	金沢大学 融合研究域 融合科学系 准教授 米陀佳祐氏

■3/6(木)スマート光・物質研究センターシンポジウムを開催します。詳しくは本学ホームページをご覧ください。

FILE-06 研究イベント

産学官向けオープンラボを開催(12/5)

今年度は59名が参加。各研究室や共用施設であるクリーンルームなどの学内施設を公開し、本学の研究活動および成果紹介しました。

また、今年度の特別招待講演として、日本IBM株式会社 研究開発・テクノロジー・エンゲージメント理事の高橋志津氏(写真)

をお招きし、「IBM-113歳でも最先端!の裏側をお伝えします」をテーマにご講話いただきました。IBM社のこれまでの実績に関するエピソードをもとに、「変化」を続けることの重要性について、強いメッセージが発信されました。



FILE-07 国際交流

韓国・昌原大学の総長一行が本学を訪問(1/14)

パク・ミンウォン総長、キム・デシク教授(国際協力本部長)ほか3名が本学を初めて訪問しました。

昌原大学は韓国の釜山から車で35分の所に位置する、開校50周年を迎える国立大学です。産業が発達する昌原市で

産学連携に力を入れていることなどから、本学に関心を寄せ、今後の交流の可能性を探りたいとのご意向があり、本学保立和夫学長らと懇談を行いました。

創造性開発工房やクリーンルームなどの施設見学や研究室の見学を通じ、本学



への理解を深めていただきました。

南山大学・豊田工業大学連携講演会を開催 ～講演テーマ「“宇宙”と“神”の謎に挑む」～(12/1)

本学からは富沢真也教授が「定理から迫る、アインシュタインの遺産『ブラックホール』の謎」と題して、また、南山大学からは金承哲教授が「人間のなかのX」探偵小説として読む遠藤周作」と題して、それぞれ講演しました。

本講演会は、1年ごとに両学の会場で交互に開催し、今年は本学の「豊田喜一郎記念ホール」で実施。2003年に大学間協定を締結して以来、19回目の開催となります。毎年、地域の方々に関心を寄せていただき、今回は200

名を超える聴講者をお迎えしました。両学の研究成果を広く社会に向けて今後も教育活動における連携を進め、発信します。



左:富沢真也教授(本学 数理物理学研究室)と右:金承哲教授(南山大 南山宗教文化研究所)

2024年度 次世代文明センターシンポジウム 3/5(水)開催決定! 「今こそ暴力と平和について考える」

参加申込などの詳細は、本学ホームページをご覧ください。

- 日程：2025年3月5日(水) 13:00より
- 会場：豊田工業大学 豊田喜一郎記念ホール(オンライン参加も可)
- 講演：伊勢崎賢治氏(東京外国語大学 名誉教授)「平和はつくれるか」
- 演奏：伊勢崎賢治氏(トランペット)・坂本千恵氏(ピアノ)

伊勢崎賢治氏



未来の兆しを読み解くスペシャルTV対談番組に保立和夫学長が出演しました

NEWS

現代社会のさまざまなキーワードをもとに「ミライがどう変わるのか?」に迫り、第一線の現場から「ミライ予報」をお届けするTV番組「ミライキャスト」。

「ディープレック」をテーマとする回において、保立学長が本学の「過去・現在・未来」について、塩尻奈都子アナウンサーとの対談を通じ、本学の知の基盤としての役割について、メッセージを発信しました。



【番組概要】

名古屋テレビ(NBN/メ〜テレ) ミニ番組「ミライキャスト」

12/13(金) 24:20、12/14(土) 22:56、12/15(日) 23:09の3夜連続1分半程度で放送

【番組ホームページ】<https://www.nagoyatv.com/miraicast/>

右QRコードより、番組公式YouTubeにおいて放送回を視聴いただけます。(2025年12月まで)

番組視聴
はこちら ▶



編集後記

長期ビジョンの「個を輝かせる」という想い。個性や強みを伸ばせる仕組みが充実している本学では、学生がそれらを上手に活用し、「自分らしさ」に磨きをかけています。その彼ら“らしさ”を本誌を通じて皆さまにも感じていただけたら幸いです。